

作詞 川口汐子
作曲 池辺晋一郎

第一章 姫路のあけぼの

やまなみの いずこよりくる
聴き澄ませ ふるさとのうた
うなばらの いずこよりくる
聴き澄ませ ふるさとのうた
ふるさと ひめじ

播磨なる くにのもなかに
そそりたつ 五層の天守
しらすぎの いこえる城ぞ
ありあけの 雲にせまれり

山川の目覚める刻ぞ
しのめの ひかりかぎり
連なる 広家・増位
峯々の みどりぞいづく

いにしへの神が投げたる
琴ありき 丘となりたり
いにしへの 神が立ちたる
丘ありき その丘まろし

ゆりかもめ 白く憩える
市川の流れば澄みて
若鮎は 波にきらめき
夢前の せせらぎ清し

さざり立つ 飾磨の入江
わたつみの 網干のみなど
瀬戸内の 鳥影いくつ
さやかに 朝あけてゆく

うつくしき 朝のやまなみ
聴き澄ませ ふるさとのうた
うつくしき 朝のうなばら
聴き澄ませ ふるさとのうた
ふるさと ひめじ

第二章 城—千姫によせて

しらすぎの 城を仰げば
そそりたつ 五層の天守
雲ながれ 遠き日に似つ
香くわしき そのおもかげを
茜さす 空にえがきて
いまぞ歌わむ 千姫 千姫
うるわしのひと

手にたゆき 銀の鏡や
夕風は 吐息に似つつ
桜ちる ふたひら みひら
かなしみは 花明かりして
あえかなる すがたをうつす
いまぞ語らむ 千姫 千姫
うるわしのひと

勢隠しの 杜は濃みどり
しらすぎの 一羽すがしく
おりたちて やすらうものを
西の丸 まひる静けく
おくれ毛も ほのかに匂う
いまぞ 偲ばむ 千姫 千姫
うるわしのひと

第三章 こどもの祭

のじぎく咲いた 秋の日だ
姫路の祭りだ 青空だ
みこしをかつげ この肩に
大地をふもふ この足で
ヤッサ ヤッサ エンヤノヤッサ
ヤッサ ヤッサ エンヤノヤッサ
エンヤノヤッサ

みこしかがやけ 金いろに
稲もみのつて 穂を垂れた
ゆれゆれ ゆすれ
きらめけ ひかり
姫路の祭りだ
ぼくらの祭りだ
ほら とんでるよ
赤とんぼ

すすき揺れてる 秋の日だ
姫路の祭りだ 青空だ
獅子も舞え舞え 舞い狂え
仔獅子うかれて でんぐりかえり
ヤッサ ヤッサ エンヤノヤッサ
ヤッサ ヤッサ エンヤノヤッサ
エンヤノヤッサ

お面かぶった きみは誰?
天狗・ひよっこ 豆狸
手と手を つなげ
輪になれ おどれ
姫路の祭りだ
ぼくらの祭りだ
ああ 柿の実が
わらってる

もずが啼いてる 秋の日だ
姫路の祭りだ 青空だ
ねじりはちまき ひとむすび
ひびく太鼓に むねが鳴る
ヤッサ ヤッサ エンヤノヤッサ
ヤッサ ヤッサ エンヤノヤッサ
エンヤノヤッサ

ふるさとの風 さわやかに
ぼくらのいのち さわやかに
うてうて ひびけ
空まで とどけ
姫路の祭りだ
ぼくらの祭りだ
ごらん 夕陽が
まつかだね

ふらふらと 虹を架けよう
幾十万の鼓動がとどろく
幾十万のいのちがうたう
大いなる 虹を架けよう
世界につながる 姫路の明日へ
わかものよ 旅立ちの用意はよいか
その足は きたえてあるか
その眸は もえているか
父はおまえに 勇気と信頼を
母はおまえに 愛とはげましを贈ろう
おまえがひらく あたらしい世紀の
あすをいのちにつて
野をめぐる 峯はみどりに
瀬戸の海 ひかりみなぎる
いざ ひらけ とびらを 友よ
風かおり 胸はふくらむ

野をめぐる 峯はみどりに
瀬戸の海 ひかりみなぎる
いざ ひらけ とびらを 友よ
風かおり 胸はふくらむ

第四章 栄光の世紀へ

野をめぐる 峯はみどりに
瀬戸の海 ひかりみなぎる
いざ ひらけ とびらを 友よ
風かおり 胸はふくらむ
歩み出そう 友よ
大いなる 虹を架けよう
希望の 誓いの 熱いのちの
虹を架けよう

あたらしい国生みがある
あたらしい世紀がひらく
みよ
われらの町は晴れ 空は晴れ
にんげんのいのち きらめくところ
にんげんのちえ みのるところ
ここにわれらは未来をひらく
わが町 姫路 わが町 姫路

あ
われらの町は晴れ 空は晴れ
幾十万の鼓動がとどろく
幾十万のいのちがうたう
大いなる 虹を架けよう
世界につながる 姫路の明日へ
わかものよ 旅立ちの用意はよいか
その足は きたえてあるか
その眸は もえているか
父はおまえに 勇気と信頼を
母はおまえに 愛とはげましを贈ろう
おまえがひらく あたらしい世紀の
あすをいのちにつて
野をめぐる 峯はみどりに
瀬戸の海 ひかりみなぎる
いざ ひらけ とびらを 友よ
風かおり 胸はふくらむ

あ
われらの町は晴れ 空は晴れ
幾十万の鼓動がとどろく
幾十万のいのちがうたう
大いなる 虹を架けよう
世界につながる 姫路の明日へ
わかものよ 旅立ちの用意はよいか
その足は きたえてあるか
その眸は もえているか
父はおまえに 勇気と信頼を
母はおまえに 愛とはげましを贈ろう
おまえがひらく あたらしい世紀の
あすをいのちにつて
野をめぐる 峯はみどりに
瀬戸の海 ひかりみなぎる
いざ ひらけ とびらを 友よ
風かおり 胸はふくらむ

「交響詩ひめじ」

楽曲紹介

1989年。姫路市制100周年を記念して、ふるさと讃歌「交響詩ひめじ」が制作されました。「市民の間で未永く愛され、親しまれる楽曲を作りたい。」そのような思いに応え、姫路を代表する歌人と世界的にも著名な作曲家がタッグを組みました。

作詞は、ふるさとを愛する心を織り込み、「姫路」の名を世界へ飛翔させるため、何よりも地元を熟知している川口汐子氏に依頼。清新な歌風で高い評価を受ける歌人として、また、子供たちに多彩な世界を魅せる童話作家として、そして随筆家として、幅広い分野で旺盛な作家活動を続けた川口氏が、姫路の風土や暮らしについて研究を重ね、地元の魅力を4つの楽章に紡ぎ出しました。

その歌詞に、美しい音楽を乗せてくださったのは、世界的にも著名な作曲家・池辺晋一郎氏。日本アカデミー賞最優秀音楽賞や国際エミー賞をはじめ数多くの受賞歴を有し、現在も日本各地のホールや音楽団体にディレクターや委員の役を担っています。種々の技法を軽快に操る機敏さや機知に富んだ表現が高く評される池辺氏が、人々の心に響く格調高いメロディとリズムで新たな1曲を生み出しました。

川口氏のふるさとを愛する心と池辺氏の壮大な音楽によって生まれたふるさと讃歌「交響詩ひめじ」。初演から約30年の時を経てなお、地域の音楽団体を中心に大切に歌い継がれています。

声楽家・林裕美子氏が語る「交響詩ひめじ」の魅力

川口汐子氏の後を継ぎ、2010年から「交響詩ひめじ」合唱コンクールの審査員を務めている声楽家・林裕美子氏。審査員の就任にあたっては、「交響詩ひめじ」の詩を丁寧に読み込み、川口氏が記した文献も積極的に手にしたと言います。川口氏とも深い親交があり、「交響詩ひめじは美しく、読むだけでも美しい詩」と語る林氏に各章の魅力を伺いました。

第1章 姫路のあけぼの

自分の住むまちの名前が次々に出てきますので、歌っていると故郷に対する思いや愛が溢れてくるのではないのでしょうか。姫路には山があり、海があり、平野がある。播磨一帯の土地の隅々にまで目をやり、俯瞰して書かれたこの楽章には、景観的にとても恵まれた姫路のまちの美しさが描かれています。

第3章 こどもの祭

灘のけんか祭りをはじめ、祭りに対する情熱が熱いまち姫路。姫路の歌でなければ、川口先生はこの楽章を書いていなかったのではないのでしょうか。大人から子供へ代々引き継がれている祭り、地域の誇りをずっと忘れないでほしいという子供たちへの思いが込められたこの楽章は、子供たちが歌うことで一層味わい深く感じられます。

非常に美しい日本語で書かれた「交響詩ひめじ」。「まずは詩をしっかりと楽しんでほしい」と林氏は言います。「あらゆることに目を配り、日常生活を送る中で姫路への思いを深めた川口先生。結婚を機に姫路に住み始められた先生ですが、この詩からも姫路を愛してくださっていたであろうことが存分に感じられ、そのことを大変嬉しく思います。未来に向かって歩いていく子供たちへのメッセージが込められた詩。今、この歌を歌う子供たちが詩に込められた奥深い世界全てを理解できなくても、歌い続けることで、心に残り、いつか花開く時が来ることを願っています。」

初演以来、毎年来姫してコンクールの審査・講評してくださっている池辺先生。同氏の詩に対する深い理解から生まれたこの合唱作品により、川口氏の平和と未来への思いは生き生きと次代に歌い継がれます。

第2章 城—千姫によせて

姫路は多彩な自然に囲まれたまちではありますが、やはり中心にあるのはお城です。城主の妻として、一人の母として、千姫という女性がこの時代をどのように生きたのか。彼女の生き方を通して、ありし日の城の姿をしのびます。

第4章 栄光の世紀へ

二度の世界大戦から復興を遂げた日本。「あたらしい国生みがある あたらしい世紀がひらく」という詩にも現れているように、この楽章には戦争を体験した方の平和に対する思い、子供たちへの希望を持ちなさいというメッセージが込められています。